慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	産業革命期南部ウエールズ製鉄業の資本調達に関する一考察
Sub Title	A Study of the Financing of the South Wales Iron Industry in the Industrial Revolution
Author	工藤, 教和(Kudo, Norikazu)
Publisher	
Publication year	1974
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.16, No.6 (1974. 2) ,p.106- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19740225-03959082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

産業革命期南部ウエールズ製鉄業の資本調達に関する一考察

工　藤　教　和

目　次

はじめに
Ⅰ．資本調達の特徴
Ⅱ．クローシェイ家の経営をめぐる問題
むすび

はじめに

イギリス製鉄業の生産力は，18世紀末から19世紀の前半にかけての時期に急激に上昇した。1788年に85基の高炉 Blast-furnace で年間6万8千トンの銑鉄を生産していたが(1)，1815年には約200基の高炉で34万4千トンから37万7千トンを生産するようになった。さらに1850年になると450基ほどで250万トンを生産するに至った。同年に休止中の高炉も合算すると炉数は，600基を越していた(2)。60年の間に生産量にして37倍，炉数にして7倍の成長を遂げたことになる。この生産力の飛躍的上昇過程において，南部ウェールズ South Wales 地方の製鉄業の比重は，大きかった。第1表は，イギリス全体の銑鉄生産量と南部ウェールズの生産量とを示している。第2表は，銑鉄生産量の地域別比重を百分率で表示したものである。これら二つの表から南部ウェールズの製鉄業が，この時期，就中19世紀初頭から40年代にかけて，生産において如何に圧倒的な地位にあったか推察できよう。

南部ウェールズの製鉄業は，たんにその産業部門で優位を占めただけではなかった。イギリス資本主義全体の発展に対しても少なからぬ影響を与えた。たとえば1830年代から始まった，数回の「鉄道ブーム」を頂点とする「鉄道時代 Railway Age」に軌条 Rail 生産の主役を担ったのは，南部ウェールズの製鉄所であった。リヴァプール――マンチェスター鉄道 Liverpool and Man-

(1) D. Mushet, Papers on Iron and Steel, 1841, p. 44, quarted in A. Birch, The Economic History of the British Iron and Steel Industry 1784-1879, 1967, p. 121.
(2) A. Birch, ibid., p. 121.

第1表 イギリス及び南部ウェールズの銑鉄生産量（1806年—1852年，単位トン）

年次	連合王国	南部ウェールズ
1806	243,851— 258,206	68,867
1820	400,000— 368,000	154,000
1823	455,166— 452,000	182,325
1827	690,000— 690,500	272,000
1828	702,584— 703,184	279,812
1830	677,417— 653,417	277,643
1839	1,248,781—1,343,000	453,880
1840	1,396,400	505,000
1842	1,046,428—1,347,790	
	1,099,608	317,430
1843	1,215.350—1,214,550	457,350
1847	1,999,608—1,998,808	706,680
1848	2,093,736	631,280
1852	2,701,000	666,000

A. Birch, op. cit., pp. 124-126, p. 130. より作成

第2表 銑鉄生産量の地域分布（1806年—1880年，パーセント）

地域／年次	ウマエンールムルーズス	スドタシフォャー	シシュャロップ	スンコドットラ	ヨウイーエディクスィシトンャラグ	ダャービイシ	カランランバンカシャードン	ダラグーノイディーラームスィン	リンーカザンントプン	その他
1806	31.03	19.16	21.30	9.00	10.33	4.00	0.54	—	—	3.64
1823	42.93	29.36	12.73	5.38	6.00	3.08	—	0.52	—	—
1830	44.59	31.34	10.82	5.52	4.27	2.66	—	0.80	—	—
1839	38.80	28.99	6.46	15.70	4.20	2.73	—	0.04	—	2.08
1847	36.16	19.30	4.42	26.99	3.38	4.76	—	4.99	—	—
1852	25.77	30.18	4.44	28.69	2.22	3.33	—	5.37	—	—
1855	27.12	26.63	3.78	25.74	2.82	3.62	0.51	9.18	—	0.60
1860	26.63	16.11	3.79	24.50	2.58	3.28	4.42	17.22	0.19	1.28
1865	19.00	18.32	2.41	24.13	2.56	3.92	6.48	20.99	0.53	1.36
1870	17.15	14.97	1.81	20.25	1.38	3.01	11.31	27.31	1.25	1.56
1880	12.23	7.87	1.14	13.53	3.96	4.73	19.88	31.19	4.99	0.48

A. Birch, op. cit., p. 128より作成

chester Railway をはじめ国内の鉄道の多くは，南部ウェールズ製の軌条を使用した。また国内にとどまらずアメリカ合衆国やヨーロッパ大陸諸国にも南部ウェールズから軌条が輸出された。1833年リヴァプールから海外へ船積されるために，まずカーディフ Cardiff に集荷された鉄の3分の2は，アメリカ合衆国向のものであったと言われる。(3) アメリカの鉄道建設と南部ウェールズ製

(3) A. H. John, The Industrial Development of South Wales 1750-1850 An Essay, 1950, pp. 103-104.

鉄業との密接な関係は，ウェールズの大製鉄業者の一人クローシェイ Crawshay が1853年にアメリカの鉄道会社債を24万9千99ポンドも所有していたことからもうかがわれる。(4) これらの社債の多くは軌条販売代金の一部として，ベアリング商会 Baring Brothers and Co. 等のマーチャントバンカーを仲介に受け取ったものであった。(5) 国内だけでなく国外に対しても関連をもち続けていたことは，軽視できない。後に有力な競争相手としてスコットランドが登場してくるまで，南部ウェールズ製鉄業の軌条生産に占めた位置は，きわめて重大であった。

増大する軌条の需要に応えることのできた高い生産力は，それではどのような経営形態を通じて実現されたのであろうか。南部ウェールズの製鉄業の典型的な経営形態と，その基礎である技術的条件は何であったのか。18世紀はじめアブラハム・ダービーI世 Abraham Derby I のコークスを燃料とする製銑法の開発，1775年以降急速に普及したワット J. Watt の蒸気機関の送風機構への導入，これら二つを大きな契機として金属鉄抽出の工程＝製銑工程は，自然的，人格的条件による制約から解放された。しかし銑鉄を脱炭して可鍛鉄（錬鉄）を製造する精錬工程は，燃料問題等多くの技術的困難を抱えていた。しかし1783年と84年にヘンリー・コート Henry Cort がパテントをとった攪拌炉 Puddlig furnace と圧延工程 Rolling mill の結合による棒鉄生産の方法は，製鉄業技術の変革の上で一つの画期をなした。パッドル法 Puddling process による精錬は，完全に熟練労働を排除するものではなかった。しかし製銑工程と精錬工程が同一の立地条件の下で遂行される可能性を生み出した。(6) 銑鉄，錬鉄を一貫して生産する構造的統合経営の技術的基盤はかくして形成された。

この技術的基盤の上に立って早くから統合経営を志向した地域こそ，外ならぬ南部ウェールズ地方であった。1787年ウェールズの製鉄業者リチャード・クローシェイ Richard Crawshay は，コートとの間にパッドル法導入に関する契約を結んだ。同年クローシェイの経営するシファースファ製鉄所 Cyfarthfa Ironwoks の一週当りの棒鉄生産能力は，わずか10トンにすぎなかった。(7) しかしパッドル法導入後の1794年にはすでにそれは80トンに上昇した。さらに1808年には年間1万トン

(4) Ibid., p. 105. また1860年代には William Crawshay II は The Mobile and Ohio Railway Co. と The Wilmington and Weldon Railway の二社の社債のイギリス最大の所有者であった。J. P. Addis, The Crawshay Dynasty, A Study in Industrial Organisation and Development, 1765–1867, 1957, Appendix II, p. 157.

(5) A. Birch, op. cit., pp. 220–221.

(6) Cort のパッドル法の意義と限界については，坂本和一「イギリス産業革命期における製鉄業技術の発展段階」（京都大学「経済論叢」99巻2号），「製鉄業における機械体系の確立過程」（同100巻2号）を参照されたい。またパッドル法の開発過程については，T. S. Ashton, Iron and Steel in the Industrial Revolution, 1924, Chapt. IV. 及び A. Birch, op. cit., pp. 33–43. に詳しい。

(7) 契約は，パッドル炉によって生産された棒鉄1トンにつき10シリングを Crawshay は，Cort に対して支払うという内容であった。Charles Wilkins, The History of the Iron, Steel, Tinplate and Other Trade of Wales, 1903. p. 277.

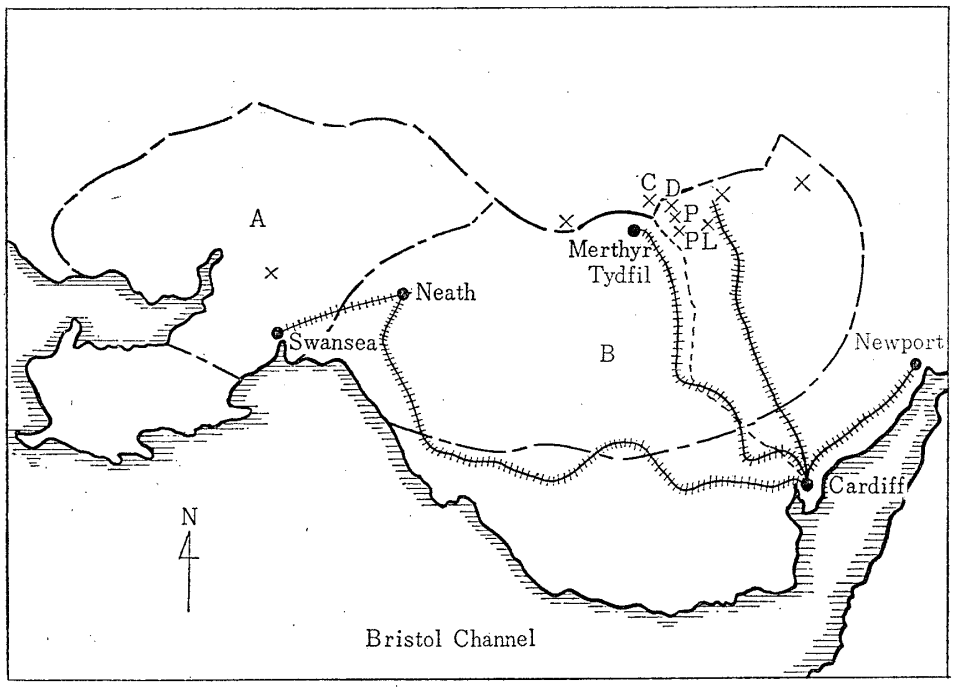
の棒鉄をこの製鉄所で生産された銑鉄から精錬した。[8] 他の製鉄所も次々とコートの方法を導入し，一貫生産を目指した。実用化にあたりウェールズでコートのパッドル法を若干現実的に改善したこともあって，パッドル法は「ウェールズ方式 Welsh Method」として知られるようになった。[9] もとよりパッドル法自体がもつ技術上の限界もあって，これに基礎をおく統合経営が，イギリス全土の製鉄業を完全に席巻したとみることはできない。研究史上周知の通りこの時期の製鉄業は，それぞれ地域的に特殊性，不均等性をもって展開した。[10] 南部スタフォードシャ South Staffordshire を中心とする西部ミドランズ West Midlands 地方では，周辺に展開する多数の金属加工業者と密接に結合した製鉄業が営まれていた。さまざまな用途に使用できるような，規格の異なるさまざまな鉄が，小規模な製鉄所で生産されていた。この地方では本格的統合経営の出現は遅れた。むしろ銑鉄生産専業，あるいは錬鉄生産専業の経営が，多くみられることを特徴とした。南部ウェールズに比べて明らかに生産力的に劣位にあったこの地方の製鉄業は，製品の多様化，高級化をはかることによって競争を回避し繁栄を続けた。しかしこの事実は，何ら南部ウェールズ製鉄業の経営形態上の典型性を否定することにはならない。南部スタフォードの地域は，南部ウェールズの生産能力の圧迫の故に競合しない市場へと特化したとみることができるからである。[11] まさに南部ウェールズの製鉄業は「鉄と石炭時代の子」[12] を体現していたと言い得る。

銑鉄，錬鉄一貫生産の統合経営は，南部ウェールズでは巨大製鉄所として具体的に出現した。南部ウェールズは，図1のように凡そニースの谷 The Vale of Neath を境に西の無煙炭地帯と東方の瀝青炭地帯とに大きく分割される。そのうち後者のこの時期の発展は，目覚ましいものがあった。その中でも特に北東に位置するマーサ・ティドヴィル Merthyr Tydfil を中心とする地域の発展は，注目に値するものであった。[13] この地域には，シファースファ，ダウレイズ Dowlais ペニイダラン Penydarren. プリマス Plymouth の四大製鉄所が立地していた。それらの規模は，クラッパムをしてダウレイズ製鉄所を「全くの例外」的経営として位置づけさせたほど巨大であった。[14] 1823年シュロップシャ Shropshire，スタフォードシャを合わせて稼動中の製鉄所は約60あっ

(8) A. Birch, op. cit., p. 41.
(9) Ibid., p. 41,
(10) 桑原莞爾氏は，南部ウェールズと西部ミドランズに特徴的な経営の諸類型を析出し，それぞれがどのような対抗関係をもって展開したか，きわめて興味深い分析を試みられている。同氏の所論に示唆されること大であった。桑原莞爾「製鉄業」（吉岡昭彦編著「イギリス資本主義の確立」第一篇第三章）
(11) 前掲書225-228頁.
(12) S. Pollard, The Genesis of Modern Management, A Study of the Industrial Revolution in Great Britain, 1965. p. 75.
(13) たとえば，マーサ地区の人口は，次のように急激に増加した。
1801年 7,705人，1811年 11,101人，1821年 17,404人，1831年 22,083人，1841年34,977人，1851年 46,382人。H. A.Bruce, Merthyr Tydfil in 1852, 1852, p. 5.
(14) J. H. Clapham, An Economic History of Modern Britain, The Early Railway Age 1820-1850, 1926 pp. 429-430.

たが，一つをのぞいて他は年間1万トン以上の銑鉄を生産する所はなかった。しかし先にあげた四

第1図　19世紀中葉の南部ウェールズ



A　無煙炭地帯　　B　青炭地帯　×　製鉄所
……グラモーガンシャ運河　C.→Cyfarthfa, D.→Dowlais, P.→Penydarren, PL.→Plymouth.
J. P. Addis, op. cit., p. Vll より作成。

つのうち三つの製鉄所は，すでに一万トン以上を生産していた。たとえばシファースファは2万4,200トン，ダウレイズは2万2,287トンを生産していた。(15) 資本金額も巨大であった。たとえば1813年シファースファ製鉄所は16万ポンドの資本金であった。(16) 四者のうちでは比較的規模の小さかったプリマス製鉄所でさえ1833年には10万ポンドをはるかに越す資本を使用していた。(17) 雇用労働者

(15) H. Scrivenor, History of the Iron Trade, from the Earliest Records to the Present Period, 2nd ed., 1854, reprinted 1967, pp. 132-134.

(16) National Library of Wales MSS., Cyfarthfa Papers, 1813年8月26日付 William Crawshay I より Benjamin Hall 宛書簡。Crawshay は，Hall に対して，自分の出資金は，10万ポンド，Hall のそれは6万ポンドに確定しようと述べている。この Cyfarthfa Papers は，National Library of Wales (N. L. W) に12巻からなる冊子と14のボックスと2編の付録の形で，保存整理されている。それらは主に Crawshay 家の手紙や，彼らが関係した Cyfarthfa をはじめとする企業の元帳等によって構成されている。N. L. W. の好意によりその一部をマイクロ複写することができた。この史料の詳細な分析によって完成したのが，J. P. Addis の先に掲げた労作である。本稿は，Addis の著作に依拠すること大であった。なお，以下この史料からの引用は，直接参照した手紙等については，日付，発信人，受信人氏名を記すにとどめた。またAddisの著作を経由して探索したものについては，Addis の著作の該当ページも加えて示した。

(17) Report from the Select Committee on Manufactures, Commerce, and Shipping, 1833, (Irish University Press, British Parliamentaty Papers, Industrial Revolution, Trade, Vol. 2.) 以下 BPP. MCS. 1833 と略記する。QQ. 10237-10240. 週100トンの棒鉄を生産するためには，10万ポンドの資本を要した。Plymouth Ironworks は，この時週400トンの棒鉄を生産していた。

第3表 グラモーガンシャ運河で輸送された鉄（銑鉄・棒鉄・その他）の製鉄所別内訳

単位，トン

年 / 製鉄所	1817	1822	1827	1832	1837
Cyfarthfa *	14,191	17,137	29,312	24,668	33,590
Dowlais	9,936	14,557	20,726	29,395	38,914
Penydarren	8,275	9,924	10,369	10,582	12,934
Plymouth	7,095	8,833	12,907	9,200	15,353
そ の 他	0	2,023	11,632	9,832	24,129
計	39,497	52,474	84,946	83,677	124,810

* Hirwaun 製鉄所を含む

H. Scrivenor, op. cit., p. 124, BPP. CEC. 1842, p. 635. より作成。

数も莫大であった。同じ1833年に南部スタフォードの平均的製鉄業者ウィリアム・マシューズ William Mathews がコーバインズヒル Corbyn's Hill に400—500人を雇用していたのに対して，プリマスでは約1,500人を雇用していた。(18) さらに1842年の「児童雇用委員会 Children's Employment Commission」の報告書の中には，ダウレイズ製鉄所がこの年5,192人労働者を雇用していたことが記載されている。(19) 第3表はグラモーガンシャ運河 Glamorganshire Canal を通して運搬された4社の鉄の数量を示している。製鉄所規模の巨大さが推測できよう。

19世紀前半の南部ウェールズの製鉄業は，上述のいくつかの点からみただけでも多くの重要な諸特徴をもつことが判明した。それではこのような製鉄業が，どのような過程で蓄積を進めていったのであろうか。この資本蓄積過程を多面的に分析し，明らかにして行くことが，緊要である。本稿では，19世紀前半に南部ウェールズの製鉄業が，どのような資本調達の方法をとったかを過去の研究の成果に即してまず明らかにしたい。次にそこで提起された問題が，製鉄企業内部の経営にどのような問題を投げかけたかを検討する。その際ウィリアム・クローシェイ1世 William Crawshay I 支配下のシファースファ製鉄所の経営をめぐって，内部に展開された論争を対象とする。これをもって南部ウェールズ製鉄業の資本蓄積過程の一コマを明らかにし，多面的分析の一助としたい。

(18) BPP. MCS. 1833. Q. 9604, Q. 10222.

(19) Children's Employment Commission, Appendix to the First Report of Commissioners (Mines) Part II, 1842, (I. U. P. BPP. Industrial Revolution, Children's Employment, Vol. 8) 以下 BPP. CEC. 1842 と略記する。 Evidence Collected by Rhys William Jones. No. 99.

I　資本調達の特徴

前述の如く巨大な南部ウェールズの製鉄業は，それではどのような資本によって創設され発展を遂げたのか。またそれらがどのような方法によって必要追加資本を調達していたのか。この二点について研究史の成果を簡単に整理してみたい。

第一の点に関して，A. H. ジョン A. H. John の有名な指摘がある。すなわち18世紀後半以降経営を始めるには，比較的大規模な資本の投下を必要とした。しかし工業化の伝統の少ないこの地方では，そのための資本を十分に供給できなかった。したがって地域外からの資本流入こそが，南部ウェールズの産業革命の特徴であった。そしてこの資本移動の主役を担う資質を備えていたのは，商人資本家層であった。また資本移動は同時に企業家の移動でもあった。[20] このように彼は主張する。この見解は広く承認されたものであった。わが国においてもたとえば中川敬一郎氏は，この見解を基礎に論を進めている。すなわち一方には合理性の地道な追求によって，小生産者的発展を遂げたミドランズの製鉄業者に代表される企業家があった。他方，南部ウェールズの製鉄業発展の口火を切ったのは，冒険的投機的企業者性能を旨とするロンドン・ブリストルの商人達であった。合理的企業者性能と冒険的企業者性能の二類型が企業者性能に認められるとする氏の論の一つの例証として，この対比はとりあげられた。[21] さらに角山栄氏は，クローシェイ家の企業者活動を扱った中で，商人資本家の移動が南部ウェールズの製鉄業創設の決定的側面であったことを前提としている。したがって氏は，クローシェイ家の経営における産業的機能が優越性を獲得することをもって産業資本への転化を説こうとしている。[22] ジョンの見解からかくして，ロンドン，ブリストル等地域外資本の流入＝商人資本の流入→製鉄所創設→企業者活動の展開→産業資本の確立という定式が派生することになる。[23]

商人資本の果した役割の重要性を示す証左は多い。たとえばシファースファやプリマス等の製鉄所を創設したアンソニイ・ベイコン Anthony Bacon は陸軍省軍需品部 Board of Ordnance に対し大砲供給の契約をもつロンドンの商人であった。彼は七年戦争の武器製造を第一の目的としてシファースファ地域の鉱区および土地を賃借して生産を開始した。[24] また後にベイコンのパートナー

(20) A. H. John. op. cit., pp. 23-24.
(21) 中川敬一郎「産業革命期の企業者活動をめぐる経済史的，経営史的，企業者史的研究」（社会経済史学会編「近代企業家の発生」所収，174-177頁。）
(22) 角山栄「産業革命期南ウェールズ鉄工業における企業者活動――クローシェイ家の場合――」（京都大学「経済論叢」99巻1号，68―69頁，79―81頁。）
(23) 桑原莞爾「産業革命期南部ウェールズ製鉄業の再編過程」（熊本大学「法文論叢」第23号，159頁。）
(24) 彼は，はじめアメリカに渡りメリーランドで植民地貿易に携わっていた。後1745年頃にロンドンに帰っていた。そして1758年を皮切りに，軍需品の納入や西インドへの奴隷貿易などについて政府との関係が↘

となり，さらにシファースファを飛躍的な成長へ導びいたリチャード・クローシェイも，すでにロンドンに基礎をもつ商人であった。(25) またペニイダラン製鉄所は，ハンフレイ一族 Homfray のリース権をもとに，ロンドンの鉄商リチャード・フォアマン Richard Formen の出資が加わることによって確立した。(26) さらに直接創業に参画しなくとも創業以上の寄与をした場合があった。それは急激な発展を準備するための，パートナーシップの再編成に対する関係の仕方であった。たとえばプリマスにとってのアモス・ストラットル Amos Struttle (27) ダウレイズにとってのウィリアム・テイト William Taitt (28) 等である。彼らはいずれも商人資本家であった。

一方で，商人資本家の果した役割について，先にあげた定式の批判的検討が行なわれている。桑原莞爾氏は，J. ロイド J. Lloyd 等の著作に依拠しながら，定式とは異なったコースを検出している。(29) すなわち南部ウェールズにおいても大河内暁男氏の指摘したようなミドランズ型の小生産者的発展がすでに17世紀後半から存在していた。彼らは「製鉄所賃貸借制度」を全面的に利用することによって発展を遂げつつあった。しかしその発展は，地域内関連市場の欠如，賃借契約固有の守旧的本質によって妨害された。(30) さらに製鉄業自体もマニュファクチャ段階から機械制大工業の段階へと突入して行く中で，設備の更新等のためにより多額の資本を必要とするようになった。このとき商人資本家はそれぞれのパートナーシップに参加し多大の援助を行なった。このパートナーシップ再編成の過程で，たしかに商人資本家は，他の地域と異なり決定的な意味をもった。たとえば先

＼はじまった。1765年8月29日 William Brownrigg とともに，シファースファ地区のリースを獲得した。この地で1775年以降，かの J. Wilkinson が開発した「中ぐり法」によって，銃砲を製造するに至った。L. B. Namier, 'Anthony Bacon, M. P., An Eighteenth-century Merchant', (Journal of Economic and Business History, II 1929, reprinted in W. E. Minchinton ed., Industrial South Wales 1750-1914, Essays in Welsh Econmic History, 1969.), J. P. Addis, op. cit., pp. 1-3.

(25) 彼は，ヨークシャのノーマンタン Normanton のヨーマンの出身である。16才の時，ロンドンに上り鉄商 Bicklewith の下で働いた。1763年ロンドンの炉格子製造業者の娘 Mary と結婚した。この頃 Bicklewith は，彼にすべてを託して引退した。ここからR. Crawshayは，鉄商としての確かな地位を得た。その後大砲の納入をめぐって，A. Bacon と協力関係をもつようになった。さらに1786年には，シファースファ地区の精錬所のサブリースをうけ，直接生産に進出した。J. P. Addis, pp. 4-9.

(26) 1784年，Bacon とのシファースファでの契約を放棄した Homfray は，ペニイダラン地区を借区した。そして Richard Forman から 2,500 ポンドを借入して高炉を建設した。1786年には，Cort のパッドル法を導入するための資金を得るべく，Forman をパートナーに迎えた。A. H. John, op. cit., p. 33.

(27) 1803年に再編されたパートナーシップ契約条項によると，出資金2万ポンドのうち，1万5,000ポンドを Struttle が出資している。J. Lloyd, The Early of the Old South Wales Ironworks, 1760 to 1840, 1905, pp. 80-81.

(28) John Guest の娘 Sara の夫 William Taitt は，商人であった。彼の販売面での努力と資金の融通によって，Guest 家は Dowlais の支配権を掌握して行った。また Dowlais 自身も飛躍的発展を遂げた。A. Birch, op. cit., pp. 70-74,

(29) 大河内暁男「イギリス工鉱業における作業場および土地の賃貸借制の展開とその意義」(一)，(二)，(三)，(立教大学「立教経済学研究」17巻4号，18巻1号，同3号) および同氏著「近代イギリス経済史研究」第5章を参照されたい。

(30) 桑原莞爾「南部ウェールズ製鉄業の形成過程に関する覚書」(東北大学「文化」31巻3号)

のストラットルやテイトである。しかしそれは産業資本蓄積の媒介機能を果したにすぎず，基本的には産業資本家—機能資本家の利害が貫ぬかれていたとみる。そして形態の差こそあるが小生産者的発展のコースが貫徹していると考えている。(31) ストラットルやテイトが担ったのは，ヒルやゲストの産業資本としての蓄積を促進強化する機能であった。ストラットルが利潤の分配として，当時の利子率に等しいような5％を受け取っていたことからもこの論を確証している。(32)

たしかに先の定式のようなコースを辿って発展した製鉄所は少ない。シファースファの場合が典型的な例としてあげられたにすぎない。ゲスト家やヒル家そしてハンフレイ一族がこの南部ウェールズの地に進出してきた時，彼らはミドランズ型の小生産者の域を出るものではなかった。それらがダウレイズ，プリマス，ペニイダラン等の巨大製鉄所を経営するに至った。これらの事実からするならば，桑原氏の論理は妥当性をもつものである。しかしここで注目しなければならないのは，むしろ彼らが上昇する過程において必らず商人資本家の参画があったことである。この商人資本家の援助なしには決して南部ウェールズの製鉄業は，このように発展はしなかったであろう。この点については定式を主張する人々は勿論のこと，桑原氏も積極的な評価を下している。さらに桑原氏は，これらの商人資本家が「暖簾 Good-will」を通じて販売部門を担当することによって，製鉄業の巨大化を市場面から現実化する契機をなしたこと，したがって単なる資金提供者にとどまらなかったことを重視している。(33) 製鉄所賃貸借制度の利用によるミドランズ型小生者的発展のコースとは区別される特殊な型をもった発展が，南部ウェールズ製鉄業に認められるべきではなかろうか。そこでは地域外商人資本家の果した役割があまりにも決定的であった。

創業あるいは発展を準備したパートナーシップの再編成に果した商人資本の役割をみてきた。次にこうして創設あるいは再編成された製鉄業が如何にして追加資本を調達したかを考えてみる。この問題は当然この地域における有効な金融市場とくに資本市場の発達の有無に関連する。最近の学界ではとくにこの資本の動員が，株式会社法成立以前に如何にして行なわれていたか注目されている。さらに従来短期的信用の担い手という枠内でのみ位置づけられてきた銀行の役割も，拡大して考えられるようになってきた。少なくとも19世紀初頭までは，この流動資本部分の供給の方が，重要な問題であった。そしてこの円滑な供給こそが，固定資本投資を助長したと考えるようになった。(34) 原材料の購入，製品の販売についての手形による決済，委託販売による前貸，銀行による手形の割引等，商業信用，銀行信用の広範にはりめぐらされた信用のくもの巣こそが，資本蓄積研究の

(31) 桑原莞爾，前掲「産業革命期南部ウェールズ……」161-162頁。
(32) 前掲稿162頁。
(33) 前掲稿165頁。
(34) François Crouzet ed., Capital Formation in the Industrial Revolution, 1972, Editor's Introduction, pp. 43-44.

中心的課題に据えられるべきだとまでされている。[35] このような問題意識をもって南部ウェールズについて分析した研究が，十分にあるとは言い難い。ここではこの乏しい研究の成果を整理する形で，ウェールズの製鉄業の追加資本調達の一側面を特徴づけることにする。他は今後の研究課題の一つに残さざるを得ない。

18世紀後半から19世紀前半の時期に必要資本の調達は，第一義的には利潤の強制的内部留保によるとされている。T. S. アシュトンが指摘したソーンクリフ製鉄所 Thorncliffe Ironworks のような事例が，[36] 南部ウェールズについてもみられた。たとえばシファースファの場合である。クローシェイ家初代リチャードの時代において，個人の利潤部分からのもち出しは極力控えられていた。ある時には月30ポンドでしかなかった。[37] 地代と借区料 Royalty を支払った残りをすべて内部留保しようとした意志の現われであった。こうして対仏戦争の軍需景気によって得られる高利潤のほとんどが，内部に留保された。第4表は，当時の高い利潤率を示している。このことが，1790年の資本金1万4,369ポンドを98年には，10万3,908ポンドへと上昇させた第一の要因であった。[38] ウィリアム・クローシェイI世の時代にもこの考え方は存続した。彼は，1821年にシファースファのマネイジャーであった次子ウィリアム・クローシェイII世に対し，利潤をできるだけ内部に留保するようにとの書簡を送った。[39]

第二にとられる方法は，同一の人間がパートナーとして参加している一つの企業から他の企業への融通であった。南部ウェールズの場合特徴的なことは，創業資本の性格ともあいまって融通する側に，ロンドンやブリストルの商会が多かったことである。後に触れるがシファースファのすべての権利をウィリアム・クローシェイI世が掌握する過程で莫大な額の資金が，クローシェイがパートナーとなっているロンドンの商会から投入された。[40] 先にあげたゲストやヒルにしても商人資本家からうけた金融的便宜は多大のものであった。

第三に一般の借入によって調達する方法があった。ウェールズの場合，これがとくに個人的な枠内にとどまっていたことが強調される。発達した金融市場は，存在しなかった。したがって貸し手には，親戚，知人等縁故者，パートナーが，圧倒的に多かった。[41] 初期のダウレイズ製鉄所の場合借

(35) S. Pollard, 'Fixed Capital in the Industrial Revolution in Britain', (Journnal of Economic History, Vol. 24, No.3. 1964, pp. 305-314.)
(36) T. S. Ashton, op. cit., pp. 156-158.
(37) Cyfarthfa Papers, Cyfarthfa Ledger, 1790-98, J. P. Addis, op. cit., p. 155.
(38) A. H. John, op. cit., p. 41.
(39) 1821年12月23日 Wm. Crawshay I—Wm. Crawshay II, Addis, pp. 155-156.
(40) Cyfarthfa のパートナー Joseph Bailley から持分買収のため3万2,000ポンド，Benjamin Hall から持分買収のため9万ポンド，Anthony Bacon II の所有する借区権買収のため9万5,000ポンド，Hirwaun 製鉄所獲得のため3万ポンド合計24万7,000ポンドの殆んどが，ロンドンの商会（以下 London House と略記）から投じられた。J. P. Addis, ibid., p. 158.
(41) A. H. John, op. cit., p.45.

第4表 Cyfarthfa の半期毎利潤率

1792年7月	46.57%
12月	35.3 %
1793年7月	26.8 %
12月	
1794年7月	
12月	5.17%
1795年7月	9.77%
12月	8.8 %
1796年7月	12.6 %
12月	52.2 %
1797年7月	
12月	19.7 %
1798年7月	

A. H. John, op. cit., p. 41

入が多くみられたが，それらはすべてパートナー達が，個人的関係によって調達してきたものだった。(42) またパートナーからの借り入れは「最も少ない持分所有者が，最も大きな貸し手」(43) であるような事態をもたらしたこともあった。

借り入れがこのような個人的な枠内に限られていたとするならば，この地方の地方銀行 County banker はどのような機能をもっていたのか。長期的信用の地方銀行による供与は，多くの場合個人的関係の枠内で説明される。とくにそのオリジンに多くを関係させて考えることができる。(44) それでは地方銀行が本来的に果すと考えられた少額の支払手段の供給，手形決済，送金の仲介等は，ウェールズの場合どうであったのか。南部ウェールズの製鉄業と地方銀行との関連について，簡単に考察してみたい。

初期のそして比較的に規模の大きい銀行は，ブレカン Brecon，アベガヴニイ Abergavenny，カーマセン Carmarthen 等に設立されていた。しかし対仏戦争以降産業資本家の手によって設立された銀行もある。たとえばニューポート Newport のハンフレイ商会 Homfray and Co. やカーディフのゲスト商会 Guest and Co. である。さらにマーサティドヴィルに1813年設立されたピアス，ウィリアムズ商会 Pierce, Williams and Co. も同じ性格のものであった。前者にあげたグループの活動は，農業的性格のものが多かった。したがって手形割引等の機能を適切に果たすことができなかった。(45) ただ1813年ブレカンのウィルキンズ商会 Wilkins and Co. からプリマス製鉄所が5万4千ポンドの抵当貸付をうけていた事例がある。(46) しかしこれは先に述べた個人的関係による貸付であった。1807年にウッド家 The Wood によって設立され，1820年代に倒産したカーディフ銀行 Cardiff Bank の生涯をみてもわかるとおり，製鉄業とのつながりはきわめて薄いものであった。(47) 他方後者のグループは，主に小額支払の手段としての銀行券を発行するために設立されたものであった。それらは設立した産業家の援助なしには存立し得ない銀行であった。

周知の通り18世紀末から19世紀30年代の時期に産業家たちは賃銀支払のための小額の貨幣に不足していた。賃銀を長期間一括して支払うもの，現物支払制度 Truck system を導入するもの，私

(42) Ibid., p. 43.
(43) Ibid., p. 45.
(44) 産業家に起源をもつ地方銀行の場合，その産業への長期的信用の供与を行なう事例があった。L. S. Pressnell, Country Banking in the Industrial Revolution, 1956. pp. 322-325.
(45) A. H. John, op. cit., p. 47.
(46) Ibid., p. 48.
(47) T. M. Hodges, 'Early Banking in Cardiff', (Economic History Review, XVIII, 1948.)

鋳貨 Token coin あるいは紙券 Paper money を発行するもの等，種々の対応策がとられた。[48] 地方銀行登場の背景は，このようなものであった。[49] シファースファでも19世紀最初の10年間一部紙券を発行していた。しかしこの方式は，労働者には勿論，クローシェイ自身にも利益にならないと判断するようになった。そしてシファースファの会計係をしていたピアスとウィリアムズに開設させたのが先のピアス，ウィリアムズ商会であった。この銀行の銀行券によって賃銀支払等に充てるつもりであった。[50] しかしこの銀行は当初からクローシェイのロンドン商会の手助けなしには存続できなかった。早くも1820年代のはじめには，困難につきあたった。したがってクローシェイの紙券発行が余儀なくされた時期が続いた。最終的にクローシェイの紙券発行が停止するのは，先のブレカンのウィルキンズ商会に発行業務を全面的に移譲した1828年のことであった。比較的規模も大きく安定したブレカン銀行は，これ以降シファースファとロンドン商会との金融的業務の仲介をも果すようになった。[51]

多くの南部ウェールズの地方銀行は，基盤が脆弱なため製鉄業の取引から生ずる手形の割引業務を制限した。それは概して製鉄業関係の手形は期間が6カ月以上に及ぶものが多かったためである。そこで製鉄業者たちは，他地方の銀行に割引をしてもらう場合があった。そしてその銀行とウェールズの銀行とのロンドン代理店を通じた清算によって手形割引の実をあげようとする事例があった。[52] またその際ロンドンの商人出身であるような製鉄業者は，ロンドンの商会を通じた手形の決済によって活路を求めた。[53] そしてロンドン商会を通じてのロンドンの有力な銀行との連携が大きな強みを発揮した。とくにその傾向は，産業循環の下降局面において著るしく現われた。援助の少ないもの，たとえばヒル家が支配権を獲得した後，すなわち商人資本家を排除した後のプリマス製鉄所は，幾度か棒鉄の在庫負担に耐え切れず価格切下げ競争の口火を切った。[54]

1826年スウォンジー Swansea にイングランド銀行の支店が開設された。[55] これを契機に地方銀行の統合強化が進んだ。さらに1835年カーディフにナショナル・プロヴィンシャル銀行 National Provincial Bank の支店が開店した。これに象徴されるような新らしい型のロンドン銀行の進出によって，この地域の銀行制度は整備されつつあった。また株式会社形態の採用によって資本を動員しようとする動きも30年代から本格化した。しかし当面する時期は全体としてはこれら新らしい

(48) J. P. Addis, op. cit., p. 159.
(49) L. S. Pressnell, op. cit., Part I.
(50) 1813年1月19日 Wm. Crawshay I—B. Hall. 「Pierce と Williams がまもなく銀行を開くだろう。この銀行によって紙券を回収するつもりである。」
(51) J. P. Addis, op. cit., pp. 160-162.
(52) A. H. John. op. cit., p. 49.
(53) Ibid., pp, 50-51.
(54) Ibid., pp. 51-52.
(55) しかし，再割引の基準は，かなり厳格なものであった。R. O. Roberts, 'Bank of England Branch Discounting, 1826-59', (Economica, XXV, 1958.)

方向への過渡期であった。[56] そのために追加資本調達の各側面についても，ロンドンやブリストルの商人が担った役割は決定的に重要であった。クローシェイのロンドン商会が，シファースファの「金融的中核」であったとするアッディスの表現[57]はまさに当を得ている。

莫大な鉄の生産力に比して脆弱な金融市場しかもたなかったのが，南部ウェールズの一つの特徴であった。したがって商人資本家の金融面に果した重要性が，ここでも確認されてきている。それではこの商人資本家との関係は，何の摩擦も生ぜずに産業資本の発展を支えたのであろうか。具体的に経営の内部に何らかの問題を惹起したのではなかろうか。ダウレイズやプリマスの場合は，生産に基礎を置くゲストやヒルがテイトやストラットルの持分を買収することによって最終的には商人資本を排除した。[58] しかしロンドン商人リチャード・クローシェイによって成長したシファースファの場合は，様相が異なっていた。そこでは二つの別会社が存在していた。すなわちシファースファの製鉄所とロンドンにある鉄商社リチャード・ウィリアム・クローシェイ商会 Richard and William Crawshay and Co. であった。この二つの会社の利害が，具体的に如何なる形で現象したかを考察してみたい。それによって商人資本との関係がもった意義と限界の一端を明らかにしたいと考える。

II　クローシェイ家の経営をめぐる問題

1810年6月製鉄業者クローシェイ家の初代リチャードが死去した。一説によると彼は150万ポンドもの資産を遺したと言われている。しかし真偽の程はたしかではない。[59] 多分誇張であろう。しかし彼は判明しているだけでも莫大な財産を遺したことは事実である。長子ウィリアム・クローシェイI世は，10万ポンドに及ぶ各種資産とシファースファおよびロンドンの商会の筆頭持分 Major share を相続した。[60] 以後1834年に彼が逝去するまで24年間に渉って彼はロンドンの商会とウェールズの製鉄所の経営を支配した。1951年に J. D. エヴェンス J. D. Evans のモノグラフ[61]が出るまで，何故かウィリアムI世は不当にも過小評価されていた。C. ウィルキンズ C. Wilkins の著作によれば，彼は金融業者でかつ西インド貿易商人であったとされ，リチャードの死後わずか数年で逝ったことになっている。[62] しかしエヴァンスは，この誤まりを正し，彼こそが「鉄王 Iron King」

(56) A. H. John, op. cit., pp. 52–57.
(57) J. P. Addis, op. cit., p. 162.
(58) J. Lloyd, op. cit., p. 83, A. Birch, op. cit., p. 74, 桑原莞爾　前掲稿　160–161頁。
(59) C. Wilkins, op. cit., pp. 70–71.
(60) J. Lloyd, op. cit., p. 67.
(61) J. D. Evans, 'The Uncrowned Iron King, The First William Crawshay.' (The National Library of Wales Journal, Summer 1951, Vol. VII.)
(62) C. Wilkins. op. cit., pp. 79–80.

であったと評価している。[63] その後アッディスの著作が出るに及んで,「鉄王」ウィリアム・クローシェイⅠ世は，正当な地位を回復しそれをゆるぎないものにした。ここでエヴァンスとアッディスの労作に依拠し,「鉄王」支配下の経営においてどのような問題が生じたかを探り，もって先の課題にこたえる一助としたい。

ウィリアム・クローシェイⅠ世はリチャードから二つの会社の経営を相続して早々，二つの仕事に取りかかった。そしてそれらを成功裏に終らせた。その一つはシファースファの単独の所有者となることであり，他の一つはアンソニイ・ベイコンⅡ世 Anthony Bacon Ⅱ(Ⅰ世の庶子)が所有するシファースファに関する権利，具体的には借区権等，を買収することであった。リチャードの死後シファースファのパートナーシップの構成は次のようになっていた。ウィリアムⅠ世が8分の3，リチャードの女婿ベンジャミン・ホール Benjamin Hall が同じ8分の3，そして残り8分の2がリチャードの甥ジョセフ・ベイリイ Joseph Bailey となっていた。[64] そのうち，1813年にはベイリイがシファースファを去り，[65] 結局ウィリアムⅠ世は8分の5の持分をもつに至った。また同年4月シファースファのマネイジャーとしてウィリアム・クローシェイⅡ世が経営に参加した。[66] 問題はホールの持分を買収することであった。しかしホールは簡単には応じなかった。それは彼が，ロムニイ谷 Rhmney Valley のユニオン製鉄所 Union Ironworks の所有者であったためである。[67] 世紀転換点頃一時シファースファは，鍛鉄所の能力の方が過剰で銑鉄を近隣の製鉄所からの供給をあおいだ時期があった。[68] そのような時リチャードはユニオン製鉄所を買いとり，ホールは最終的にそれをリチャードから相続した。したがってロムニイの銑鉄はその多くがシファースファに売渡されていた。しかし1813年頃になるとシファースファは銑鉄の自給能力をもっていた。これ以上ロムニイの銑鉄を必要としなかった。[69] しかしホールにしてみれば死活の問題であった。さらにシファースファに渡す銑鉄は，それに対する負債の返済にあてられるものでもあった。[70] したがってホールは，

(63) 不当な取扱いをうけた理由は，彼がシファースファには居住せずロンドンに住み，そこから指令を出していたことによるらしい。地方史家 Wilkins が，このことを気付かなかったのであろう。J. D. Evance. op. cit., p. 12.

(64) J. Lloyd, op. cit., p. 67, J. P. Addis op. cit., p. 38.

(65) 1813年1月19日 Wm. Crawshay I—B. Hall, Addis, p. 39.

(66) 1813年4月29日 Wm. Crawshay Ⅰ-Wm. Crawshay Ⅱ, Addis, p. 39.

(67) B. Hall は，1801年 Richard Crawshay の娘 Charlotte と結婚した。彼は，1803年 Union Ironworks のパートナーとなり，Richard の死に際して，Richard の持分をも相続し，単独の所有者となった。J. P. Addis, op. cit., pp. 13–14, pp. 60–61.

(68) Ibid., p. 11, p. 61.

(69) 1813年1月30日 Wm. Crawshay I—B. Hall,「Cyfarthfa の高炉は非常に多くの鉄を生産していることは御存知でしょう。……Romney の鉄は一銭の得にもなりません。」

(70) 1813年2月1日 Wm. Crawshay Ⅰ-Wm. Crawshay Ⅱ「Cyfarthfa が Romney の鉄を掛買で購入するような形をとっているとしても，それは事の本質ではない。その金はどこから来たものか。Cyfarthfa に対して Romney が負債を負っているからではないか。……今後とも，もし Romney に余裕が生ずるなら，それらはすべて Cyfarthfa への債務の返済にあてるべきだ。」

シファースファの持分を失うことに合意しなかった。しかしウィリアムⅠ世側からのねばり強い設得が続いた。そして最初はロムニイからの銑鉄供給をストップさせることからはじまり，ついにホールの持分を買収した。[71] 最終的には1816年頃多分戦後恐慌の影響もあったらしくホールは，シファースファを去った。[72]

1786年アンソニイ・ベイコンⅠ世が逝去した。彼の遺言に基ずき大法院 Court of Channcery は，リチャード・クローシェイに対しシファースファの高炉を含めた設備を経営するよう審決した。ただし庶子アンソニイ・ブッシュビイ Anthony Bushby ＝アンソニイ・ベイコンⅡ世が成人するまでの期間という限定があった。しかしリチャードは約5万ポンドも費やして新高炉の建設等の設備投資を行なった。[73] 1793年アンソニイ・ベイコンⅡ世が成人した。彼はシファースファの所有権を当然のように主張した。しかしリチャードは5万ポンドも投入した設備を楯にこれに応じなかった。そして1794年頃どのような交渉がなされたか不明であるが，リチャードは，シファースファの経営を継続して担う合意を得た。この時，後に問題の焦点となる借区料 Royalty を請求する権利がアンソニイⅡ世の方に生じたらしい。[74]

借区料は次のようになっていた。6,400トンまでは年額5千ポンドに固定してあったが，それ以上1万700トンまでの分についてはトン当り15シリングを支払うようになっていた。[75] これはシファースファの資本蓄積のためには大きな障害物であった。実際1813年にシファースファはアンソニイⅡ世に対し8,225ポンドの借区料を支払っていた。[76] 一方で同年シファースファは 6 千ポンド強の欠損を出した。[77] したがってウィリアムⅠ世がもし借区料の負担から解放されるならば，シファースファは順調に経営されると考えたのは当然のことであった。ウィリアムⅠ世はアンソニイⅡ世から借区権を買収する工作を始めた。半ば脅迫めいた手段が交渉の過程でとられた。アンソニイⅡ世を最も動揺させたのは，アンソニイが借区料を減額しなければシファースファは今後も欠損を出し続け，減産そして最悪の場合にはシファースファを閉鎖し，他への移転も検討せざるを得ないというウィリアムⅠ世の脅しであった。[78] 実際にウィリアムⅠ世は減産をロンドンから指示し，実行させた。[79] 1813

(71) 1813年5月には，従来の2分の1の銑鉄を Romney からうけとることにした。1813年5月5日 William Crawshay I—B. Hall そしてついに1814年6月30日をもって Romney からの銑鉄供給は停止した。同時に既にうけとった銑鉄の未払代金のうち，Romney の負債に相当する部分についての支払いを止めた。1814年 Wm. Crawshay Ⅰ—Wm. Crawshay Ⅱ, Addis, p. 62.

(72) J. D. Evans, op. cit., p. 14.

(73) J. P Addis, op. cit., pp. 10-11.

(74) Ibid., p. 12.

(75) Ibid., pp. 55-56.

(76) 1814年1月7日 Wm. Crawshay Ⅰ—B. Hall.

(77) Cyfarthfa Papers, Box 12, Financial Papers, Balance Sheet of 1813.

(78) 1813年7月22日 Wm. Crawshay I—A. Bacon Ⅱ, 1813年9月1日 do.—do. またこれほど借区料が高いままなら，Clydach Ironworks を譲り受けて，そちらの方に重点を移さざるを得ないと脅した。1813年12月20日 do.—do., Addis, pp. 58-59.

(79) 1813年6月9日，6年17日，Wm. Crawshay I—Wm. Crawshay Ⅱ, Addis. p. 58.

年1月17日シファースファは近接するイニスサッチ Ynys-fach, Innissach と合せ五つの高炉で週292-303トンの銑鉄を生産していた。(80) しかし丁度アンソニイII世から権利を買収した直後の1814年3月には三つの高炉による240トンへと減産していた。(81) この減産は意図的なものであった。1813年は不況が続いていた。この減産はこの不況下で在庫圧力の解消や労働者対策，そしてまたロムニイの銑鉄を排除する目的をももっていた。(82) ウィリアムI世は不況下の困難な情勢を逆に最大限有利に利用しようとしたのであった。1814年2月アンソニイII世はついにシファースファについての一切の権利を9万5千ポンドで手離した。(83) 権利の買収後ウィリアムI世はシファースファのフル操業を指示した。(84) そして折から開けてきた鉄価格上昇の展望の上に，最大限の利潤を獲得しようとした。

こうして1810年代半には何者によっても拘束されないウィリアムI世のシファースファが完成した。彼は同時にロンドンの商会の支配的パートナーであった。したがって彼が考えていたロンドンを販売部門とし，シファースファを生産部門として位置づける現実的基盤が完成した。彼はこの両部門の上に立ち，両者のバランスをとることによって最大の利潤を追求しようとした。(85) もし両者がスムースに嚙合うならば，彼の考え通りに進む筈であった。しかし実際には絶え間のないクローシェイ家内部での論争が，彼の死の間際まで続いた。(86) 以下においてその論争の論点の特徴的部分を整理し，その源が何であったかを探ってみたい。

1813年から34年に至るまでのウィリアムI世の出した書簡の大多数は，シファースファの現地に居住し14年からはそのマネイジャーとなり20年にはパートナーとなった(87)次子ウィリアムII世宛のものであった。ロンドンとウェールズの間にやりとりされた書簡の中に両者の立場の相違，主張が読み取られた。両者の意見の対立のあるものは，両者の個人的性格，信条，あるいは世代の相違から生じたと思われるものもあった。たとえば1820年にウィリアムII世がシファースファの館 Cyfathfa Castle を建築したいと言った時の対立である。ウィリアムI世はこれに強く反対した。前述のように彼はできるだけ個人的支出を抑制し利潤の再投資を優先させようと考えていた。この点で

(80) 1813年1月17日 Wm. Crawshay I—B. Hall.
(81) 1814年3月7日 Wm. Crawshay I—B. Hall.
(82) 1813年5月1日 Wm. Crawshay I—Wm. Crawshay II 「私は，二つか三つの高炉を停止させたいと思う。そして Romney の銑鉄を減少させ，また労働者の強情な精神を鎮めたい。」
1813年4月27日 do.—do.「Bacon との交渉中は，利益が生まれないようにすべきである。」
(83) 1814年2月18日 Wm. Crawshay I—Wm. Crawshay II 「昨晩話し合いがついた。……私は，Bacon の Cyfarthfa に対してもっていたすべての権利を，9万5,000ポンドで購入することになった。Bacon によって契約が履行されしだいそれを現金で支払う。……かくして Cyfarthfa は解放された。」
(84) J. D. Evance, op. cit., p. 16.
(85) 1820年6月15日，1823年6月6日，Wm. Crawshay II.
(86) J. P. Addis の著作の第2章，第3章は，主にこの問題を詳しく取扱かっている。
(87) Hall を排除した後，しばらくは Wm. Crawshay I の単独所有が続くが，1820年意見の対立の解決策の一つとして，Wm. Crawshay II を Cyfarthfa のパートナーにした。持分は，Hall の分に相当したらしい。J. D. Evans は，この措置を Wm. Crawshay I の 'disastrous mistake' であったとしている。J. D. Evans, op. cit., p. 19.

は彼は父リチャードとともに産業革命期第一代の企業家のタイプに属するものであった。彼の次の言葉はそれを明瞭に示している。「大きな建物は商売には何の役にも立たない。」[88] これに対しウィリアムⅡ世は農場とか邸宅に興味をもっていた。いわば家族経営におけるイギリス型第二世代[89]に近い側面をもっていた。権力と独立の象徴としてこの館を建築しようと考えていた。結局はウィリアムⅡ世の私費3万ポンドを費やして館は完成した[90]。またウィリアムⅡ世が娘の結婚のため5千ポンドをロンドンから引き出そうとした時の対立も同様な性格のものであった[91]。これらは両者の性格あるいは世代の相違によってある程度説明できるものであった。

しかしそれでは説明できない論争があった。それはロンドンとシファースファとが実際には二つの異なった会社であったことに起因するものであった。具体的なものの一つは販売権をめぐる問題であった。ウィリアムⅠ世は前述のように両者の効率的連携による運営を目指したが，この二つの会社は未だかつて一つのものになったことはなかった。パートナーの中に両者の共通項があるにすぎなかった[92]。両者のバランスを考え得たのはウィリアムⅠ世だけであって，ロンドンの他のパートナー達やシファースファのウィリアムⅡ世にとってはそれぞれの会社の利害が優先した。販売権をめぐる対立はこのような背景の下に生じた。ウィリアムⅠ世は，販売権は当然ロンドンの商会にあるべきものと考えていた。彼は1823年ウィリアムⅡ世に宛て次のように書き送った。「すべての鉄をこの商会，すなわち私を通じて販売することは，私の固い決意である。この方法によってわれわれの財産は増大し維持されるであろう。他の方法によって生ずる欠損や分裂の危険を私は負いたくない。」[93] しかしロンドンの他のパートナー達は不満であった。何故に多額の資金がシファースファに投資されねばならないのか。また何故にシファースファの鉄をすべて買いあげてまで優遇しなければならないのか。これらによって得をするのはシファースファだけだと考えた。もっと自由な裁量でロンドンの商会を経営した方が良いと考えた。ロンドンのパートナーであったジョージ・クロー

(88) 1820年9月22日 Wm. Crawshay I—Wm. Crawshay Ⅱ, Addis, p. 54.
(89) 中川敬一郎「経済発展と家族的経営」（川島武宜，松田智雄編「国民経済の諸類型」所収77-79頁）
(90) J. P. Addis, op. cit., p. 54.
(91) 1832年に Wm. Crawshay Ⅱ が，娘の結婚のため，ロンドンの商会の自分の配当分から費用を引き出そうとしたことから端を発した。この年は外国産鉄の輸入関税が撤廃されるなど数多くの悪条件が重なっていた。また Cyfarthfa の London House への負債も増大し，賃銀の引下げが検討されている年でもあった。Wm. Crawshay Ⅱは，当然の権利として引き出そうとするのであるが，Wm. Crawshay Ⅰ は認めようとしなかった。結局は Wm. Crawshay Ⅰ が孫娘のために個人資産 5,000ポンドを支出することで解決した。J. D. Evans, op. cit., pp. 23-24.
(92) London House のパートナーは，Wm. Crawshay Ⅰ の他に，彼の長子 Richard と Richard Crawshay 時代からのパートナーである Robert Moser と William Routh であった。その後幾度かの編成替が行なわれ，1822年には，Wm. Crawshay Ⅰ 7/32, Richard Crawshay 7/32, Wm. Crawshay Ⅱ 5/32, George Crawshay 5/32, Robert Moser 4/32, Wm. Routh 4/32となった。Cyfarthfa との共通項は，二人の Wm. Crawshay であった。しかし Wm. Crawshay Ⅱ は，Cyfarthfa のマネイジャーであり，重心は Cyfarthfa にあった。J. P. Addis, op. cit., pp. 41-42.
(93) 1823年6月6日 Wm. Crawshay I—Wm. Crawshay Ⅱ.

シェイ George Crawshay はウィリアムII世に対し卒直にその不満を表明した。「何故われわれは5ポンドも払わねばならないのか。ミード Mead は4ポンド15シリングだし，ビビイ Bibby は4ポンド17シリング6ペンスしか払っていない。われわれのお金はどこへ行くのだろうか。」(94) ここには何故他のディラーよりも高くクローシェイ商会がシファースファの鉄を購入しなければならないのかという根本的な疑問があった。一方シファースファのウィリアムII世の方は，自分の裁量でも機会があったら販売しても差支えないと考えた。(95) その方が合理的な販売と生産が達成でき，製鉄所のさらなる発展が期待できると考えたのであろう。1815年から16年の時期に一時シファースファの独自的販売が認められたが，すぐにロンドンの商会こそが唯一の販売者であるという原則に戻ってしまった。ウィリアムI世の支配下においては結局原則は貫ぬき，シファースファはウィリアムI世の許可の下にその近隣地域の一部だけについて独自的販売を行ない得たにすぎなかった。リチャード・ブレイクモア商会 Richard Blakemore and Co. の販売はその一例であった。(96)

それぞれがそれぞれなりの自由を求める両者の利害は，ウィリアムI世の独裁によって解決されていた。彼はパートナーシップの編成替によっても利害の調和を計ろうとした。すなわち1823年にウィリアムII世はロンドンの商会にも，ロンドンのパートナー達はシファースファにもそれぞれの持分をもつこととなった。また損益計算も両者を統一して行なうことが確認された。(97) しかしこれによって販売権をめぐる対立が解消したとは言い難い。ウィリアムII世には依然としてシファースファのマネイジャーとしての立場が重要であった。一方ウィリアムI世にとっては，ロンドンを販売部門とする調和的発展が最高のものであった。彼はウェールズの製鉄業者を度々捲き込んだ価格の切り下げ競争に対しその原因は過剰生産ではなく生産者＝製鉄業者の貧困にあると考えていた。(98) この思考法の背後には，販売には販売のための独自の組織と政策が要請されるのであって，販売者による生産者に対する販売面はもとより金融面での積極的な援助こそが，価格切り下げ競争を回避する現実的手段であるとの考えがあった。販売権の生産者側からの侵害は，決して好結果をもたらさないと考えていた。(99) ロンドンの商会はシファースファの鉄を買い上げ，それを独自の販売政策によ

(94) 1832年3月8日 George Crawshay—Wm. Crawshay II, Addis, p. 29.
(95) 1822年12月16日 Wm. Crawshay II—Wm. Crawshay I, Addis, p. 26.
(96) J. P. Addis, op. cit., pp. 23-28.
(97) 1823年5月19日二つの会社のすべてのパートナーが集まり合議した。その結果の一つは，損益計算を連結して考えることであった。他の一つは，Wm. Crawshay I, Wm. Crawshay II, Richard Crawshay, George Crawshay が各々7/32, Moser と Routh が各々2/32の持分をロンドンと Cyfarthfa にそれぞれもつようになったことであった。さらに Wm. Crawshay II は，Cyfarthfa のマネイジャーとして年2,000ポンドの報酬を受けることになり，また Wm. Crawshay I は，good-will 代として年1万ポンドを受け取ることになった。
(98) 1813年1月14日 Wm. Crawshay I—B. Hall,「Hill は，ストックを一週間ももちこたえることができない。……」J. D. Evance, op. cit., p. 27.
(99) Wm. Crawshay II が，リヴァプールまで注文を直接とりに出かけたのに対し，Wm. Crawshay I

って売るならば，シファースファは価格切下げ競争に捲き込まれずに生産に専念できると彼は考えていたのではなかろうか。

それでは，ウィリアムⅠ世の考えた販売政策とはどのようなものであったのか。それは，価格の下降局面ではできるだけ売り控えて在庫を増大させ，上昇局面をまってはじめて積極的な販売を行なおうとするものであった。(100) 価格差による利潤を志向するきわめて商人的性格の強いものであった。これに対しウィリアムⅡ世は，価格競争に積極的に参加しながら，その生産力的な優位性によって他を凌駕しようとした。それはウィリアムⅠ世ほどの資本力をもたないで，シファースファの生産に依拠しながら活路を見出そうとしたウィリアムⅡ世の当然の発想であった。(101) この点に両者の発想法の異質な面を見ることができる。したがって政策上の発想における対立が，先の販売権をめぐる対立の核心をなしていたとも言い得る。しかし現実的にはウィリアムⅠ世といえども価格切り下げ競争の影響を受けざるを得なかった。すなわち彼が原則としようとした政策は，強大な資本力を前提とし，さらに次のような条件の時有効であった。つまり価格の下降，回復，上昇が比較的短い間隔で生ずる場合である。(102) しかし1815年以降，25年のブームを例外として価格は低迷状態を続けた。(103) このような時期には，彼の政策は有効性をもたないばかりかこれに固執することはかえって危険でさえあった。場合によっては莫大な在庫を抱えたままで価格競争に参加することを意味したからである。1830年ウィリアムⅡ世はその危険性を訴えた。(104) そして結局はウィリアムⅠ世の政策は，彼の晩年には現実的有効性を喪失し事実上破綻してしまった。

以上みてきたように，販売権と販売政策をめぐる論争は，たんに個人的性格の相違に由来するものではなかった。そこには発想上の根本的相違があった。この相違こそが，長い間にわたる論争を展開させたのではあるまいか。ウィリアムⅠ世の発想法の中には，生産を重要視しながらもそれ以上に販売面を至上のものとする商人資本家的発想の残滓が存在したのではなかろうか。これとウィリアムⅡ世に代表されるような産業資本家的発想とが，軋轢を起して発生したのが前述の論争であったと考える。たしかにロンドンの商会がシファースファに与えた金融的便宜は筆舌も及ばないものがあった。ウィリアムⅠ世によるシファースファの完全な支配権の獲得は，ロンドンの援助なくしては到底不可能であった。シファースファのロンドン商会に対する負債は7万5千ポンドに達したこともあった。(105) またシファースファが激烈な価格競争の比較的外にいることができたのもロンドン

↘は，そのようなことをしたら価格を引下げるだけであるとして重ねてロンドンを通じた販売を指示した。1822年11月14日 Wm. Crawshay I—Wm. Crawshay Ⅱ, Addis, p. 25.

(100) J. D. Evans, op. cit., p. 25.

(101) J. P. Addis, op, cit., p. 82.

(102) Ibid., p. 79.

(103) 1825年に棒鉄のトン当りカーディフ船積価格が14ポンドを記録した以外，価格は10ポンド以下の低迷を続けた。そして1832年には，5ポンドを上下する水準にまで低落した。 ibid., pp. 65-78.

(104) 1829年8月6日　1830年1月10日 Wm. Crawshay Ⅱ—Wm. Crawshay I, Addis, pp. 80—81.

(105) 1831年8月12日 R. Moser—Wm. Crawshay Ⅱ, Addis, p. 162.

の商会のおかげであった。それだけにシファースファは鉄市場の安定要因としての指導性を発揮することができた。製鉄業者集会に対し，多くの場合超然とした姿勢をとり得た背景もここにあった。(106) しかし同時にロンドンの商会の存在は，生産性の優位によって生産の集積を推進しようとするシファースファ現地の発想に対し一つの障害物をなした。ロンドンの商会，シファースファ，そして両者の調和の上に立とうとするウィリアムⅠ世，これらの複雑な利害関係の背後には，商人資本の手によって創立され発展を遂げてきたシファースファが，さらに完全な産業資本へと脱皮する際に必らず経過しなければならない苦悩が横たわっていたのであった。

むすび

19世紀前半に急成長を遂げたイギリス製鉄業の中核を担ったと言っても過言ではない南部ウェールズの製鉄業の資本調達上の特徴について，まず研究史の成果を考察してみた。そこでは，商人資本の果した重要な役割が確認された。しかし同時にそれが，商人資本の流入→製鉄所の創業，企業者活動の展開→産業資本への転化という単純な定式を導くものではないことも明らかにされた。桑原氏の研究は，ダウレイズ製鉄所とプリマス製鉄所の興隆過程の分析によって，このことを論証している。本稿では，現象的にはもっとも定式に近い発展を遂げたクローシェイ家の経営について考えてみた。クローシェイ家内部の経営をめぐる論争，具体的には販売権と販売政策をめぐる対立，を簡単に考察した。このことによって，完全に産業資本の論理に従属しない商人資本家的色彩の強い行動，発想の存在が確認された。表現を変えるならば，定式通りの発展の背後には，如何に多くの諸問題が，横たわっているかの一例を示すことにもなった。当面の対立の解決は，ウィリアムⅠ世の個人的独裁であった。完全な解決は，彼の死後ウィリアムⅡ世の代になされた。その時には，ロンドンの商会の力を減ずる客観的条件もはじめて整ったのであった。(107)

以上で南部ウェールズの製鉄業の資本蓄積過程の一側面についての概観を終りたい。資本蓄積過程の多面的分析のためには，さらに市場の問題，労働力の供給，雇用をめぐる問題等からの接近が要請される。

(106) 価格維持のための協定を目指す製鉄業者集会を Wm. Crawshay Ⅰは，弱者同志のもたれあいにすぎないとみなした。誰かが逼迫し協定を破ると，すべてがこれに追随して価格を切下げざるを得なくなる。こんな協定は意味が無いと考えた。それより集会の外にいて，必要に応じてこれを利用した方が得策と判断していた。なお製鉄業者集会の歴史，及び果した役割については，A. Birch, op. cit., Chapt. Vl に詳しい。

(107) たとえば輸送手段の発達によるロンドンの倉庫機能の低化等があげられる。J. P. Addis., op. cit., Chapt. Ⅳ, Ⅴ. 角山栄，前掲稿81頁。